

一、秋田・酒田・津輕・野代・十三・沼垂・延澤・西國・松前・越前、御調物御用に被遣候もの、於彼地裁許能仕候者、寄合所より被下銀、差圖次第可相渡事。

一、御下行取御知行拜領仕候者、御切米・御扶持方其年之物成を以可返上。到翌年御藏返に而被下候者、其内を以返上可仕事。

一、江戸證人御扶持方、定證人者七十人扶持、替證人五十人扶持可被下候事。

右御定之通無相違様可有裁許者也。

萬治三年正月朔日 御印

今 枝 民 部

前 田 對 馬

奥 村 因 幡

津 田 玄 蕃

金澤御扶持方割所京御屋敷奉行中

一三 御歩小頭・御小姓横目
御扶持方覺

覺

一、御歩小頭、惣歩行並より一人多御扶持方可被下旨、子七月七日に被仰出。

一、御小將横目五百石以下、乘馬一疋・馬捕一人飼料御扶持方可被下旨、子八月十二日被仰出。

一、常之飛脚無斷遲參候者、一日に五匁宛路銀之内おさへ可申候。

右三口御定書に、今枝民部・奥村因幡附札如此。

一、早飛脚・中飛脚共に、無斷御定之刻限より遅參仕もの、常之飛脚並に路銀相渡事。

一四 領内使者駄賃・宿賃銀
之儀覺

御呢近并與力・御歩行並之者、向後御國使被仰付候刻、勿論跡々より御定之通駄賃・宿賃銀被下候。外御國使御定之應人數に、一人一日に一升宛可被下旨被仰出候間、罷歸、前月之以平均直段向後可被相渡候。平均直段之儀、加州者金澤・小松、兩所越中は今石動・高岡・魚津三ヶ所、能州者七尾・富木兩所、米屋賣相場を以平均、知行取は出銀、切

米取は御納戸銀に而可被相渡候。恐々謹言。

(延寶三年)
卯三月廿六日

横 山 左 衛 門

奥 村 因 幡

前 田 對 馬

本 多 安 房

一五 江戸詰人路銀・御扶持方等
御定

一、江戸詰人并御使人、御暇被下候以後、自分逗留仕分者、御扶持方相渡間敷候。御暇被下候翌日より道中之日限に可極事。

一、料知に御扶持方代并路銀・馬銀可被下候。但、料知に出銀被下間敷事。

一、御國境より一里に而茂他國船路に參、一宿仕候者、他國並路銀可被下候。一宿不仕候者、御國並之駄賃・宿賃可相渡事。

一、他國御使罷越時、一日之内船路・陸路有之所、其者之指出次第相極、路銀・御扶持方代者大之方へ付、運賃は證

文次第、駄賃は道程應割符可仕事。

一、待分他國御定日限無之所々に罷越刻、江戸・京御定之日限道程に見合、半日より内者引捨、半日より上者一日に可立事。

一、江戸に中仙道罷越者路銀・駄賃銀、大正持より關ヶ原迄者京都に之圖り、關ヶ原より信州追分迄は東海道之圖り、追分より下通之圖りを以可極事。

寛文元年九月十五日

一六 御切米・御扶持方・給銀等
渡様覺

一、方々居住人御切米、三ヶ一は石川・河北米、三ヶ二は越中・能州、御扶持方は其居住仕所に而可相渡。但、定在之分者其通に所々に而可相渡事。

一、御下行取日割、正月朔日より十二月晦日迄に極可申候。但、毎年二月出替之者は、二月二日より翌年二月朔日迄之日割に極可申事。

一、新參に被召出候もの御切米・御給銀、被召出日より致割